

批評

中川克志『サウンド・アートとは何か ——音と耳に関わる現代アートの四つの系譜』

(京都：ナカニシヤ出版, 2023年12月24日, ix + 275頁)

高畑和輝*

「サウンド・アート」とは何か。この問いは、これまで幾たびも繰り返されてきた。本書は、「サウンド・アート（以下：SA）」の定義を一義的に捉えるのではなく、SAのさまざまな実践の歴史を記述することで、SAのありかたを紐解くものである。著者の中川克志は、音響文化論の研究者でとくにSA研究を専門としている。著者のほかに二名の研究者を交えた前著『音響メディア史』（2015）は、音のメディアの歴史の変遷を記述し、音響技術と文化の相互作用を論じている。本書『サウンド・アートとは何か——音と耳に関わる現代アートの四つの系譜』のなかでも、前著で示された音響再生産技術の歴史自体を作品化する芸術実践を、SAの一つの系譜として取り上げている。著者はSAの歴史を「四つの系譜」に整理する。

第一章では、その見取り図とともに本書にいたる音楽史的背景が示される。1990年代には、作家へのインタビュー調査や、「音の歴史」という視点を提示し、SAの成立を考察したダグラス・カーン（1999）による研究など、基礎的な研究が登場した。2000年代にはいと複数の博士論文が刊行され、音楽家のアラン・リクト（2007）による目録や写真が多数挿入された初のSA概説書が刊行され、SAの研究環境が国際的に整備された。2010年代以降、多くの入門書が刊行されるようになる。そして、ジェンダー、人種などの観点からの研究や、美的・社会的な影響についての研究が登場し、今日ではSAというジャンルの枠組みを前提とした個別の観点を掘り下げる研究が取り組まれている。しかしながら、カーンやリクトのような、SAというジャンルそのものを問いなおす研究が長らく不在となっている。そこで著者は、そうした空白を埋めようとする試みとして本書を位置づけている。

第一の系譜は、視覚美術から胚胎しつつ、作品の構成要素に音や聴覚への問題意識を孕んだSAの流れであり、第二章で論じられる。20世紀初頭の未来派による創作楽器などを用いた騒音音楽を起源として、1950年代に音響彫刻が出現した。1970年代に音響彫刻を主題とした展覧会が開催されたのち、1980年代にSAの展覧会で音響彫刻が展示され、それらがSAの下位分類の一つとして語られるようになった。著者は、こうした展覧会における現代アートの歴史観を、19世紀に分化した諸芸術が未来派やデュシャン、ジョン・ケージら実験音楽の登場を経て再統合へと向かう進歩史的なものであり、その最先端にSAが位置づけられていたことを示した。

第三章と第四章で論じられる第二の系譜は、ケージや彼に続く実験音楽家が音楽の内外に生み出したSAの流れとされる。第三章では、ケージ的な実験音楽を受けて音楽実践として展開したSAが語られる。ケージは、環境音や非意図的な音を自身の音楽作品に取り込むべく、作曲における音のコントロールを放棄し、「音をあるがままにせよ」という原則を提示した。彼に続くフルクサスの作家たちは、ケージの原則を最大限に拡大解釈し、西洋音楽の解体を志向した。それに対し、ケージ的な実験音楽が発明した技法や理念を既存の音楽制度のなかで受容した作家たちが、SAの一種である図形楽譜や創作楽器を生み出したことが記述される。第四章では、実験音楽をあくまで音楽実践のうちに限定することで、音楽の外部における新しい芸術実践を志向したSAの流れが論じられる。1990年代にレコード会社や一部の作家たちが、自身の作品をケージ的な実験音楽と区別するために、実験音楽を既存の音楽の内部に限定し、自身の創作を音楽外部にある新しい音楽の別名としてSAという言葉を用いて示そうとした。

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2022年度入学 表象領域

第五章で論じられる第三の系譜は、19世紀後半に登場したフォノグラフやレコードなど、音響再生産メディアそのものが発する音へと意識を向けさせる作品群とその系譜である。音響再生産技術にくわえてマイクや電子音の出現、ラジオ放送の開始は人間文化の音響的環境を大きく変容させた¹。音響再生産技術が社会に浸透したことで透明化したメディア環境そのものを批判的に検証しようとする系譜として、レコード表面のノイズのみを聴かせる作品や紙製のレコードなどによってレコードの物質性を強調し、もはや自然となった音響再生産技術を意識化しようとするSAが登場した。この系譜は音響メディアの来歴とそれともなう聴覚性の変化に応答するメディア・アートでもある。

第六章で論じられる第四の系譜は、音や聴覚を主題に視聴覚で経験する系譜である。「サウンド・インスタレーション（以下：SI）」は、1970年代のマックス・ニューハウスの作品群とともに流布した、空間に音響を設置することで場所や空間そのものを体感させる表現形態である。SIは、その場で聴覚的な刺激に集中する生演奏や録音された音楽を反復聴取する従来の音楽聴取と異なる。展示空間を回遊し、視聴覚など複数の感覚を同時に用いることで受容者の聴取経験が複層化し、新しい芸術経験がもたらされる。このことを極限まで推し進めたのが鈴木昭男（1941-）の《日向ぼっこの空間》³である。同作で受容者は、鈴木が手がけた音を追体験することはできないが、テキストや写真から身体創造力を活用して音を想像／創造するよう投げかけられる。著者は、鈴木による同作品を、聴くという行為を提示する作品群として歴史的な特異点であり、SAのある種の論理的極点であると位置づけた。

第七章では本書の総括がおこなわれる。四つの系譜を概観することで、それぞれの系譜は独立したものでありつつも、相互に関係をもちながらSAというジャンルを形作ってきたことが明らかにされた。ただし、本書で検討されたSAには日本独自の文脈である可能性があり国際比較が必要な点、各系譜の記述が1990年代までにとどまり2000年代以降の展開を記述しなかった点、いくつかの実践や文脈について十分に記述できなかった点などが次なる課題として示される。そのうえで、SAの考察をすることは20世紀後半以降の現代音楽／美術の歴史研究であるのみならず、両者の比較芸術論として、あるいは現代芸術における視覚芸術優位の現況を批判的に検討するうえで新たな視点を提供しうるものであるとして、SA研究の意義が述べられる。

本書で著者は、現代音楽／美術それぞれの系譜と両者の到達点としてのSIという物語を提示し、その背景として西洋文化における聴覚性の変化と、聴覚性の変化に応答して生じた芸術としてSAを位置づける。しかし著者は、各系譜が歴史的背景を共有しつつも自律的に展開してきたことを強調する。こうした立場は、曖昧な対象であるSAを網羅的に記述にすることはできないが、より広範な対象を扱うことで概観を志向するという本書の目的に由来する。だが、四つの系譜を通じてSAの理解を深めるには、著者が博士論文から継続的に問い続けてきた「聴く」という行為と、各作品が聴くことをどのように変質させた／させ得るのが補助線となるように思われる。つまり、視覚芸術でありながら音を主題化した第一の系譜。西洋音楽の文脈で非意図的な音を音楽として聴くことを提起したケージと実験音楽達による第二の系譜。意識化されなくなった音響再生産技術を顕在化させ、メディアとして人々に再考を促した第三の系譜。そして、「聴く」という行為を提示するだけでなく、人々に強く誘いかけるSIとしての鈴木の実践が、第四の系譜における極点として示されている。このように、いずれの系譜においても音を「聴く」ことそのものが問われており、SAの歴史を通じて聴取のありかたが変質した経過をみることができるといえる。本書はSAに関心を持つ読者だけでなく、20世紀の音楽や美術の連関、聴覚文化に関心をもつ読者にも推奨したい一冊である。

註

- 1 Licht, Alan. 2007. *Sound Art: Beyond Music, Between Categories*. Book & CD. New York: Rizzoli. (邦訳：2010)。リクトは2019年、同書に大幅な改訂を加えた新版を刊行している。改訂版では目録部分が削減され、入門書としての記述が加えられている。
- 2 こうした変化をコックスは「音の流れ」と呼んだ。それは「人間の表現も含まれるが、そうした表現に先行する、または超越した太古からの物質の流れとしての音、という概念」(Cox 2018, 2)である。彼は新しい音響芸術の事例として、未来派やケージ的な実験音楽、フィールド・レコーディング、1980年代のノイズ音楽やアンビエントなどの登場を挙げている。本章は、コックスの研究を基礎に進められる。
- 3 鈴木が1988年に鑑賞者のいないパフォーマンスをおこなったレンガ造りの空間で現在は解体されている。ゆえに、彼が手がけた空間で当時の音を聴取することは不可能である(220頁)。

参考文献

谷口文和, 中川克志, 福田裕大 2015 『音響メディア史』 京都: ナカニシヤ出版.

Cox, Christoph. 2018. *Sonic Flux: Sound, Art, and Metaphysics*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Kahn, Douglas. 1999. *Noise, Water, Meat: A History of Sound in the Arts*. Massachusetts: MIT Press.

